

## 雑 草 通 信

船津好明 1936 年生まれ

思いつくままに綴り、書き直しを繰り返し、意を尽くそうと文を練るのは、心身の劣化を遅らせるのに役に立つと考えました。内容は専門外ですから、学問的には書けません。勝手に他人に送りつけるのは、この歳になった私の新たな冒険です。他人様にはどうでもよい内容かも知れません。差し障りがあるかも知れません。浅はかと思われるかも知れません。破棄して下さい構いません。(雑草の「雑」は内容が様々であること、「草」は書き留めたものの意味です。)

## 不易と流行

不易(ふえき)とは聞き慣れない言葉だが、「易」は変化の意味があるから、「不易」は不変、変わらないと言う意味になろう。「流行」は時々の変化、盛衰を意味し、不易と対照的な言葉となっている。

「不易・流行」は伝統的な言葉で、文芸などの上で深遠な意味があるようだが、そこには深入りしない。ここでは日常の感覚で、不変と思うものの中で変わり行くもの、あるいは変わり行くものの中に潜む不変なものに注目してみたい。

物事の変化をもたらすものは何か。時間の流れと空間的な広がりであろう。心の中、心理的、想像上の空間についても言える。

画家が一幅の絵を完成させるには、初めに絵の理想像、仕上がりの姿を脳裏に描いているであろう。構図、色付け等、多くの段取りを経るであろう。そして自分の思いが絵に遺憾なく表現されて、絵は完成する。一時経って画家がその絵を見たとき、ふと不満な点に気が付く。そして筆を加え意に沿うようにする。こうして絵は改善される。絵が人手に渡らなければ、こうした改善が繰り返されるかも知れない。そして絵はその度に描き手の意に叶うものに昇華していく。補修による絵の変化は流行に当たる。自分の心の中で、出来栄が理想像に照らして評価され、足りない部分を補い改める変化である。その理想像が不易に当たる。この変化の典型は絵画だけでなく、他の芸や行動にも当てはまる。音楽も同じで、作曲家、演奏家にも正に当てはまる。演奏家は一回の演奏で完全な満足を感じるものか。恐らく不満足な点を覚えるであろう。そして次回には直そうと考える。こうして芸は流行を経て上達する。

不易と流行は個人の心の中に限らず、人の集団、一般社会についても言える。万事について言える。

法制度は、社会のあるべき姿の実現のために設けられる。社会の理想像とも言える。人々を拘束し、義務付けるものだが、現実の社会は理想像とは必ずしも一致しない。乖離が大きくなると法は改められる。日本は先の終戦を機に国の姿を変えた。憲法が大きく変わった。そして日本の社会は大きく変わった。この大変化は流行に当たる。この変化の中の共通不変なものを探ってみる。文面になくても背後に「国の繁栄と国民の幸福」という基本理念が潜んでいるように思う。この理念は憲法の改正前後で変わらない。不易に当たる。

憲法の下には多くの法令が、国民生活の隅々まで、あるべき姿を唱えている。法令の改正は随時行われる。この変化が流行に当たる。全ての法令は憲法と矛盾してはならず、人々の幸福追求という不易の精神を帯びている。人々の幸福といっても、個々人全員に当てはまるかどうか分からない。どんな法令にも不満足な人、気に入らないという人はいるものである。それでも、変わりゆく法令の中の不易は「人々の幸福の追求」と言えよう。

現在の社会と 100 年前の社会を比べると、状況は大きく変わっている。隔世の感がある。そこには、幾度もの流行を経て、いかに様変わりとなっても「人々の幸せの追求」という不易の原理が生きている。

近年、驚いたことがある。婚姻は男と女によって成り立つものと思っていたが、同性での結婚を肯定する考え方が出ている。流行の兆しか。外国の例が影響しているらしい。「幸せの追求」というなら人類不易の原理には適っているが、それを認めるなら親子きょうだいの間でも、幸せになるのだと、近親婚を主張するようになりはしないか。幸せの追求や不幸の排除は人類古来、不易の命題であった。それによって戦争も起きた。個人の思いがいかに自由であっても、思いの実現が社会的な制約を受けるのは仕方がない。そうでなければ社会は成り立たない。同性婚は後世どうなるものか。